

## S・ピンカー『暴力の人類史』を読む

齋藤 敬之

## はじめに

近年、いわゆるグローバル・ヒストリーをはじめとする大局的な歴史叙述の潮流が明確に見られる。その一分野をなすものとして、「宇宙の誕生から現在に至る時間枠のなかで、自然科学系の諸学問領域の成果を総動員しながら語られる壮大な歴史」としての人類史が挙げられる<sup>1</sup>。このことは翻って、既存の歴史学にある閉塞感と相まって、歴史研究者以外の手による歴史叙述が展開される余地が存在することを意味してもいるだろう。

アメリカの認知心理学者S・ピンカーによる著書『暴力の人類史』はこのような状況下で世に登場したと言ってよい<sup>2</sup>。その理由として、第一に、20世紀の二度の世界大戦やその後の東西冷戦という実際の暴力を伴った緊張状態が過去となり、その後の大きな政治的、社会的変化を経てもなお、地域紛争やテロ、特定の地域内での治安悪化などが存在し続けている状況に対し<sup>3</sup>、「私たち自身や私たちの世界を深く理解することから始まり、何をなすべきかという答えに至るまで、様々なニーズに応えて」くれるものとして歴史への要請が高まっていることである<sup>4</sup>。それゆえピンカーに「近代性の遺産を私たちがどう認識するか——言いかえればこの世界を犯罪やテロ、戦争の多発する悪夢と見るのか、それとも歴史的な基準からみて平和的共存がかつてないほど実現した時代だと見るのか」を人々に問う動機づけが与えられたと言える<sup>5</sup>。そして第二に、ピンカー自身が「人間の本性を研究する者にとって、暴力は当然の関心事である」と表明しているように<sup>6</sup>、暴力が時代や地域を越えて人間の行動や社会に結びついたものであるがゆえに、歴史的

<sup>1</sup> 水島司「グローバル・ヒストリー研究の挑戦」(水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、2008年、2-32頁)、ここでは8頁。また、水島司『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社、2010年、2頁及び46頁も参照。

<sup>2</sup> S・ピンカー著、幾島幸子・塩原通緒訳『暴力の人類史 上・下』青土社、2015年(原著:PINKER, Steven, *The Better Angels of Our Nature. Why Violence Has Declined*, New York, 2011)。本稿では邦訳版を参照する。なお原著については、奥山真司「[文献紹介]Steven Pinker, *The Better Angels of Our Nature* [人間の本性の中にある善き天使たち]」(『戦略研究』13(2013年)、164-166頁)を参照。

<sup>3</sup> こうした状況自体が、グローバル・ヒストリーをはじめとする新たな歴史学の潮流の背景となっている。水島「グローバル・ヒストリー研究の挑戦」、2-3頁。

<sup>4</sup> M・マクミラン著、真壁広道訳『誘惑する歴史 誤用・濫用・利用の実例』えにし書房、2014年、12頁。

<sup>5</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、12頁。

<sup>6</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、20頁。

な比較や大局的な叙述に適していることである<sup>7</sup>。

後述するように、同書は人類の歴史において暴力が減少していることをさまざまな統計を用いて立証し、一般的な認識に反して、戦争や内戦などを経験している現代社会を「最も平和な時代」と表現している<sup>8</sup>。これに対し、2018年に同書を扱った *Historical Reflections* 誌の特集で<sup>9</sup>、編者L・E・ミッチェルは、ピンカーの叙述が偏向的なものですらあると批判し、さらに歴史叙述は容易であると信じているようなピンカーには歴史学上の理論や方法論、史資料への見識不足があるとの批判も向けている<sup>10</sup>。さらにM・S・ミカーレとP・ドワイヤーは、ピンカーの著書が歴史学から見て諸々の問題を孕んでいるにもかかわらず、同書が刊行直後からニューヨーク・タイムズやガーディアン、ウォール・ストリート・ジャーナル、デイリー・テレグラフといった英米の大手メディアに取り上げられ<sup>11</sup>、さらに2017年にかのビル・ゲイツが同書を称賛したことを1つのきっかけとして、近年改めて一般の読者に広く受け入れられたことに警鐘を鳴らしている<sup>12</sup>。

ところで、刊行直後のメディア上での議論に歴史研究者は大きな役割を果たしていなかった。こうした消極的な態度の背景には「癒やしのための歴史 (comfort history)」の潮流があると言ってもよい<sup>13</sup>。これは、「世界が複雑化し、必ずしもよくない方向に急速に変化しているときに、私たちがよりシンプルで明確な世界だと間違っと思いついて過去の過去」を振り返り<sup>14</sup>、「過去を訪ね、ある程度自身の価値観を補強する」ために<sup>15</sup>、非歴史研究者が歴史的变化に対する直線的で決定論的な見方で歴史を利用する状況を指している。そして、この潮流に対する歴史研究者の忌避感には先に言及したミッチェルの論評からも明白であろう。さらに、例えばS・キャロルは、ピンカーの著書が「現代に生きる我々が暴力の歴史の終わりに近づいている」という誤解を醸成していることを批判している<sup>16</sup>。しかし逆に、こうした歴史研究者の批判からは暴力の長期的な歴史を描

<sup>7</sup> 上述のような21世紀における国家や文明をめぐる価値観の動揺、国際情勢の変化に動機づけられ、比較文明史の観点から暴力を扱った研究として、山内進・加藤博・新田一郎編『暴力 比較文明史的考察』東京大学出版会、2005年が挙げられる。

<sup>8</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、11頁。先述の奥山による紹介はこの主張を肯定的に捉えている。

<sup>9</sup> *Historical Reflections/ Réflexions Historiques*, Volume 44 (2018), Issue 1. なお同特集は、DWYER, Philip/ MICALE, Mark S. (eds.), *On Violence in History*, New York/ Oxford, 2020 として再版されているが、本稿では2018年のものを参照する。

<sup>10</sup> MITCHELL, Linda E., A Message from Senior Editor Linda E. Mitchell, in: *Historical Reflections/ Réflexions Historiques*, Volume 44 (2018), Issue 1, v-vi, here vi.

<sup>11</sup> MICALE, Mark S./ DWYER, Philip, History, Violence, and Steven Pinker, in: *Historical Reflections/ Réflexions Historiques*, Volume 44 (2018), Issue 1, 1.

<sup>12</sup> MICALE/ DWYER, History, Violence, and Steven Pinker, 3-4.

<sup>13</sup> 「癒やしのための歴史」については、マクミラン『誘惑する歴史』、第2章を参照。

<sup>14</sup> マクミラン『誘惑する歴史』、20頁。

<sup>15</sup> マクミラン『誘惑する歴史』、23頁。

<sup>16</sup> CARROLL, Stuart, Thinking with violence, in: *History and Theory* 56 (2017), Nr. 4, Theme Issue 55:

くことの意義を彼らが認めている様子も窺える。そこで本稿では、ピンカーの主張や叙述のいかなる点が歴史学から見て問題となるのかを、暴力の歴史や暴力を積極的にテーマとしてきた犯罪史研究に取り組んできた研究者による論評を中心に改めて整理し検討することで、今後の研究の一助としたい。

## 1.『暴力の人類史』の概要

まず、全10章に及ぶ同書の内容を整理しておきたい。第1章「異国」は導入にあたる部分であり、人類前史から20世紀に至るまでのさまざまな逸話やエピソードを取り上げることで、「今日の世界で私たちが直面する危険は多々あるものの、過去にあった危険はそれを上回ることを読者に認識させるという同書の目的を提示している<sup>17</sup>。

「平和化のプロセス」と題する第2章では、狩猟採集を基盤とする社会から農耕を基盤とし統治機構を確立させていった先史時代にかけて暴力が減少していったことを論じている。その際、いくつかの特徴的な統計を取り上げて論証している。例えば、自然死ではなく戦争や紛争で死亡した者の割合を狩猟採集社会と（国家が構築された）文明社会とで比較したグラフから<sup>18</sup>、「文明社会の人間が暴力死を遂げる確率は狩猟採集社会の五分の一にすぎない」ことを導く<sup>19</sup>。また、戦闘によって死亡した者の数の生きている者（すなわち人口）に対する割合を同じく非国家社会と国家社会との間で対比したグラフからは<sup>20</sup>、「現代の欧米諸国の戦争による死亡率は、最も戦争で荒廃した世紀でさえ、非国家社会のおよそ四分の一であり、最も暴力的な社会の十分の一以下にすぎない」と指摘している<sup>21</sup>。

第3章「文明化のプロセス」では、中世後期から20世紀に至るまでの暴力の減少を、T・R・ガーやM・アイズナーなど英米の研究者が提示する殺人率（人口10万人当たりの殺人件数の割合）に関するデータを引きながら描写している<sup>22</sup>。こうした減少を理論的に説明するものとして、この章の題から明確なように、N・エリアスの文明化論を採用する。すなわち、「洗練や自制、作法といった セカンド・ネイチャー 習慣は学習によって身につけなければならないものであり——だからこそ「セカンド・ネイチャー 第二の天性」と呼ばれる——、そうした習慣はヨーロッパの近代史を通じて確立していった」とし、感情に任せた暴力の発露が礼儀作法の習得によって変化していったと主張する<sup>23</sup>。さらに、

---

Theorizing Histories of Violence, 23-43, here 24-25, 38-39. この中で先のマクミランの著書が参照されている。

<sup>17</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、78頁。

<sup>18</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、110-111頁、図2-2。

<sup>19</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、114頁。

<sup>20</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、114-117頁、図2-3。

<sup>21</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、116頁。

<sup>22</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、131頁、図3-1及び図3-2、135頁、図3-3及び図3-4。

<sup>23</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、146頁。また、山内進による政治思想史的研究においても、近世に漸次的に

外生的な要因として中央集権的な国家体制の整備と中世後期からの経済発展を挙げ、これらの絡み合いにより人々の相互関係や相互依存、さらには共感やセルフコントロールが高まり、それが「第二の天性」の習得に至ったと論じる<sup>24</sup>。

第4章「人道主義革命」では、中近世ヨーロッパに見られた専制政治や拷問、魔女狩りといった暴力の諸形態が17-18世紀に廃止されていき、平和主義的な動きが見られたことを論じている。「こうした動きのなかから新しい思想が形成された。それは生命と幸福を価値観の中心に置き、理性と明確な裏付けをもって制度を設計しようとするものだった。この新しい思想は人道主義または人権思想とも呼べるもので、それが突如一八世紀後半の西洋世界に影響を及ぼしたことは人道主義革命と名づけるに値するできごとだった」として、その「革命性」を強調する<sup>25</sup>。こうした変化の要因として、印刷物の増加と識字能力の向上が挙げられる。すなわち、読書体験の増加及び新たな情報や視点の獲得によって他者への共感や感情移入、さらには生命への配慮が習得されることが論じられている<sup>26</sup>。

第5章「長い平和」では、意表をついて物理学者にして応用数学者でもあったL・F・リチャードソン(1881～1953年)の予測を引き<sup>27</sup>、20世紀に二度の世界大戦を経験した後、大国／先進国が互いに戦争を行うことを放棄し平和な時期が続いた状況を描く。まず、「二〇世紀は歴史上、もっとも血なまぐさい世紀だった」という言葉は、無神論からダーウィン、政府、科学、資本主義、共産主義、進歩の理想、はては男という性まで、実に多岐にわたる悪役を非難するときの決まり文句のように使われてきた」状況に懐疑を向ける<sup>28</sup>。そして、「大国間の戦争が起きた年数の割合(1500～2000年)<sup>29</sup>」や「大国が関与した戦争の頻度(1500～2000年)<sup>30</sup>」、「大国が関与した戦争の継続期間(1500～2000年)<sup>31</sup>」、「大国が関与した戦争の死者数(1500～2000年)<sup>32</sup>」、そして「大

---

進んだ文明化の1つの証左として、殺人などの「私的な」暴力の減少が挙げられている。山内進「暴力とその規制 西洋文明」(山内進・加藤博・新田一郎編『暴力 比較文明的考察』東京大学出版会、2005年、9-49頁)、ここでは34-37頁。

<sup>24</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、159-160頁。近代国家の意義に関して、比類する指摘は山内進「暴力とその規制」、38-43頁に見られる。

<sup>25</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、252-253頁。

<sup>26</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、320-326頁。

<sup>27</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、349頁。

<sup>28</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、355頁。

<sup>29</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、401頁、図5-12。

<sup>30</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、401頁、図5-13。

<sup>31</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、403頁、図5-14。

<sup>32</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、403頁、図5-15。なお、水島『グローバル・ヒストリー入門』、28頁で引用されている、ビッグヒストリーの提唱者D・クリスチャンが作成した表「戦争による死者数(十六～二十世紀)」は100年ごとの戦死者数や1000人当たりの死者の割合を提示しているが、時間の経過に伴う明確な増加と上昇を示しており、ピンカーのグラフとは矛盾する。

国が関与した戦争の死者数の濃度<sup>33</sup>」といったデータのいずれでも、対象期間全体とくに1950年代以降の減少が見られるとし、上記の一般的な見方の修正を図る。すなわち「ヨーロッパ圏における年間衝突発生件数(1400～2000年)<sup>34</sup>」でも「ヨーロッパ圏における衝突による死亡率(1400～2000年)<sup>35</sup>」でも減少ないし停滞傾向が見られるとする。さらにピンカーが強調するのが、第二次世界大戦後における「平和」の状態である。その証左として、「紛争において核兵器が使用された回数」、「冷戦期に、二大超大国が戦場で相まみえた回数」、「一九五三年以降、大国同士が戦争をした回数」、「第二次世界大戦終結以来、西欧諸国間で戦われた国家間戦争の数」、「一九四五年以来、主要先進諸国(一人あたり所得の上位四四ヵ国)間で戦われた国家間戦争の数」、「一九四〇年代後半以来、他国を征服することによって領土を広げた先進国の数」、そして「第二次世界大戦以後、国際的に承認された国家が征服によって消滅した事例」のいずれも「ゼロ」であることを強調する<sup>36</sup>。こうした量的変化の理由として、ピンカーはとくに20世紀後半以降に見られる指導者及び一般民衆のメンタリティの変化を挙げる<sup>37</sup>。さらにこうした変化の背景には、第一に、I・カントに拠りつつ、民主主義国家の成立と増加、いわゆる「民主的平和論」がある<sup>38</sup>。そして第二に、経済的自由主義の普及及びグローバルな貿易の展開により、各国が協定などを締結することで相互依存の関係になる状況、いわゆる「自由主義的な平和」を挙げている<sup>39</sup>。ピンカー曰く、この2つの要素は不可分である。なぜなら、「民主国家は専制君主がいなくても、国民はより豊かで、健康であり、教育レベルも高く、国際貿易や国際機関を受け入れやすい傾向にある」からである<sup>40</sup>。

「新しい平和」と題する第6章は、20世紀末以降の紛争や戦闘(内戦、ジェノサイド、独裁政権による弾圧、テロ)の減少を扱う。すなわち、「新しい平和」とは、二〇年以上前に冷戦が終結して以降、間欠的に進んできた戦争やジェノサイド、テロの量的減少を指している。それは長い平和ほど長期間ではなく、人道主義革命ほど革命的でもなく、文明化のプロセスのように文明化が一気に進んだわけでもない」とする<sup>41</sup>。こうした状況をもたらした要因として、民主主義の定着と拡大、国家の繁栄、まっとうな政府、平和維持活動の展開、開放的な経済、反人道主義的

<sup>33</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、405頁、図5-16。「濃度」とは「戦争がもたらす一国・一年あたりの死者数」を指す。同書、406頁。

<sup>34</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、409頁、図5-17。「衝突」には国家間戦争以外に小規模の戦争や内戦、ジェノサイド、反乱などが含まれるという。以下の図5-18も同様。

<sup>35</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、411頁、図5-18。なお、17世紀初頭の宗教戦争期、フランス革命及びナポレオン戦争期、二度の世界大戦期に急上昇が見られる。同書、410頁。

<sup>36</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、443-446頁。

<sup>37</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、456-457頁。

<sup>38</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、491-501頁。

<sup>39</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、502-507頁。

<sup>40</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、501頁。

<sup>41</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、624頁。



なイデオロギーの衰退といった 20 世紀後半の世界を特徴づけていた諸要素の変化を挙げる<sup>42</sup>。

第 7 章「権利革命」では、「人権」をはじめとするさまざまな権利の主張や態度の変化と暴力の減少とを関連づけている。すなわち、1948 年の世界人権宣言を象徴的な出来事とし、それ以後少数民族や女性及び子供、同性愛者、さらには動物など向けられた暴力に対する嫌悪感や忌避感が増大したと指摘する。この証左として、「英語の書物における「公民権」「女性の権利」「子どもの権利」「同性愛者の権利」「動物の権利」という言葉の使用頻度（1948～2000 年）」と題する表を挙げ、こうした語が時期の差があるとはいえおよそ 1960 年代から 1980 年代に急増したことを示している<sup>43</sup>。ピンカーは、暴力に対する嫌悪感や忌避感の増大に暴力の不道徳性への拒否とその代わりとして共感と倫理の増加を見出し、「権利革命」を啓蒙主義、人道主義、自由主義の融合と把握する<sup>44</sup>。そしてこうした変化は、時系列上でも性質上でも先に挙げた「長い平和」や「新しい平和」とパラレルに生じたとし、民主主義の構築、情報経済の構築、アイデアやテクノロジーの発達を变化の要因として挙げる<sup>45</sup>。

第 8 章からはピンカーの専門である心理学的アプローチが展開され、さまざまな実験結果を参照しながら暴力を行使したり抑制したりする要因が論じられる。「内なる悪魔」という題を掲げる同章では、暴力を生み出す 5 つの心理学的要因が挙げられる。第一は「捕食的・道具的暴力」であり「ある目的のための手段として力行使する」ものを指す<sup>46</sup>。第二に「ドミナンス」を挙げる。これは「ライバルよりも自らが優位に立とうとする衝動的欲求」を意味し<sup>47</sup>、挑発や威嚇、口論といった「それ自体では無意味だが、それによって優位争いを引き起こすような行動」に関係する<sup>48</sup>。第三は「リベンジ」で、「受けた危害を同じように返そうとする衝動的欲求」である<sup>49</sup>。この際、こうした衝動及びその連鎖を防ぐものとして強力な政府や法の支配を挙げており、第 3 章での主張とも符合する<sup>50</sup>。第四に「サディズム」であり、「傷つけることを喜びとする」性向を指す<sup>51</sup>。その典型として、連続殺人や猟奇殺人のみならず、とりわけ前近代社会で頻繁に実施された拷問を挙げている点は無視できない<sup>52</sup>。第五は「イデオロギー」である。「あるイデオロギーを心から信じている人びとは、さまざまな動機を一本の教義におりなし、そこに他人を引き込んで、破壊的

<sup>42</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、651-652 頁。

<sup>43</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、15 頁、図 7-1。

<sup>44</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、181 頁。

<sup>45</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、183-184 頁。

<sup>46</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、240 頁。

<sup>47</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、241 頁。

<sup>48</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、253 頁。

<sup>49</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、241 頁。

<sup>50</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、296-301 頁。

<sup>51</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、241 頁。

<sup>52</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、312-316 頁。

な目標を遂げさせる」とその役割を規定する<sup>53</sup>。ところで、ここまで挙げた心理学的要因を食欲や性欲、睡眠欲といった「永遠の衝動」とは同列に扱っていない点が注目されるであろう<sup>54</sup>。このことは、内的あるいは外的な要因が暴力の行使を制限したり抑え込んだりする余地があることを示唆し、潜在的には平和を好む人間像を提示している。

これを受けて第9章「善なる天使」では、こうした暴力を抑制する内的あるいは心理学的機能が論じられる。ピンカーは、人間には暴力を抑制あるいは減少させる機能がもともと備わっていると主張し耳目を集めたが、4つの機能を挙げている。第一に「共感」であり、「他人の痛みを感じ取り、他人と自分の利害を一致させようとする動き」を指す<sup>55</sup>。第二は「セルフコントロール」で、「衝動にもとづいて行動した結果を予想し、その行動を抑えようとする心の動き」を意味する<sup>56</sup>。これを踏まえ、暴力犯罪の大半がセルフコントロールの欠如した衝動的なものであるとし<sup>57</sup>、セルフコントロールは習得され得るもので、それによって暴力が抑制され得るというエリアスのテーゼを心理学や神経科学の知見などから裏付けている<sup>58</sup>。第三は「道德感覚」で、「ある文化における人間同士の相互関係を規定する一連の規範やタブーを正当と認める」心理的態度である<sup>59</sup>。そして第四に「理性」である。ピンカーはこれを「自分の生き方について省みることを促して、より良い状態になるにはどうすべきかを考えさせ、人間性のほかの「天使」たちを活用する方向へ私たちを導く」と説明する<sup>60</sup>。さらにピンカーは、「社会が一応ある程度の文明化をはたしたところで、そこからさらに暴力を減らすのに最大の希望を与えるのが理性なのだ」として、暴力の減少における理性の意義を強調する<sup>61</sup>。

終章にあたる第10章「天使の翼に乗って」は、暴力を減少させ世界を平和に向かわせている5つの外生的な要因やプロセスを挙げ、全体の議論を総括している。第一に「リヴァイアサン」である。第2章や第3章で論じていたように、国家による暴力の独占や司法制度の統制機能を高く評価する<sup>62</sup>。第二は「穏やかな通商」である。利益の獲得や追求の際に、そこに関与するすべての者の利益がない「ゼロサム」状態の戦争ではなく、互いに協力しすべての者に利益が上がる「プラスサム」を求め、交易のための制度やインフラを構築するようになっていくことを意味す

<sup>53</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、241頁。

<sup>54</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、195頁。

<sup>55</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、18頁。

<sup>56</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、18頁。

<sup>57</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、408頁。

<sup>58</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、412-429頁。

<sup>59</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、18頁。

<sup>60</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、19頁。

<sup>61</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、531頁。

<sup>62</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、552-554頁。

る<sup>63</sup>。第三は「女性化」である。第8章でも論じられていたが、男性は女性よりも暴力的であった。その裏返しとして、女性の利益を尊重すること、すなわち「政治による直接的な女性への権限付与、男らしい名誉の文化の衰退、女性自身の意思による結婚の促進、女兒が無事に生まれられる権利、自身の繁殖に関する裁量権の保持など、さまざまなかたちでの女性化」が暴力の減少に貢献したという<sup>64</sup>。第四は「輪の拡大」である。第4章で論じられたような読み書き能力の向上やマスメディアの発達により他者への理解や共感が醸成された<sup>65</sup>。そして最後に「理性のエスカレーター」が挙げられる。時代を経て知識や合理性を獲得することで、それまで暴力を導いてきた迷信や矛盾といったものが信念体系及び価値体系から排除され、こうした新たな体系が広く共有されて暴力の減少に至るとする<sup>66</sup>。そして、この章並びに同書は、「私たちの人生にどれほどの苦難があろうとも、そしてこの世界にどれほどの問題が残っていようとも、暴力の減少は一つの達成であり、私たちはこれをありがたく味わうとともに、それを可能にした文明化と啓蒙の力をあらためて大切に思うべきだろう」との言葉で締めくくられている<sup>67</sup>。

## 2. 歴史研究者からの批判の論点

この締めくくりの言葉、さらには過去の時代を残酷で暴力的であった「異国」と表現していることからわかるように<sup>68</sup>、『暴力の人類史』の叙述には「暴力が減少し平和な現代」と「暴力に満ち残酷な過去の時代」を対比させる理解が通底しているという印象は免れ得ない。それゆえ、同書を論評する歴史研究者の批判もこうした点に向けられている。

### 2-1. データや統計の取り扱い

「本書ではさまざまな数字をデータから抜き出したり、グラフに示したりしつつ、読者を説得していかなければならない」とピンカー自身が明言しているように<sup>69</sup>、暴力の減少を説明し得るデータが数多く提示されている点が彼の叙述の特徴である。しかし、まさにこのことが歴史研究者の批判的論調が集まる点の1つともなっている。B・ツィーマンが早くも2012年の論評で指摘したように、統計上の暴力の減少によって現代を「平和」と見なす点、及び統計のみによって

<sup>63</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、555-558頁。

<sup>64</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、558-565頁（引用箇所は565頁）。

<sup>65</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、566-567頁。

<sup>66</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、568-571頁。なお、ピンカー自身が認めるように、「エスカレーター」という比喩にはホイッグ史観が反映されている。なぜなら、「西欧やアメリカ沿岸部に端を発した自由化の改革は、時間差をおいて、世界のもっと保守的な地域でも模倣されていった」からである。同、570頁。

<sup>67</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、579頁。

<sup>68</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、26頁。

<sup>69</sup> ピンカー『暴力の人類史 上』、13頁。



暴力の減少という歴史的变化を十分に説明し得るとする点に懐疑的である<sup>70</sup>。また、R・ロス、M・アイズナーが近年改めて整理した 1200 年から 1830 年までのヨーロッパにおける殺人率の統計を参照し、当該時期には殺人率の長期的な減少傾向が見られないことを指摘している<sup>71</sup>。そもそも暴力の歴史を扱う研究、とくに犯罪史研究では、計量的分析と解釈的分析をめぐる方法論的議論が進んでおり、前者で用いられる殺人率（人口 10 万人当たりの殺人件数の割合）をはじめとするデータや統計の問題点やそこから得られる成果の限界などが明らかになっている<sup>72</sup>。ここではスイスの近世史研究者 F・レッツに従い、4 つの問題点を取り上げる<sup>73</sup>。

第一に、「いかなる暴力が統計に計上されるか」という類型の問題である。例えば殺人の場合、「いかなる行為が殺人罪にあたるか」という点は規範レベルでも裁判などの実践のレベルでも時代や社会によって可変的である。それゆえ、殺人率を通時的に比較することは困難となる。さらに殺人の場合、ある身体的攻撃ないし傷害行為が医療水準によってそれが死に至るかどうかが変化する。すなわち、身体的攻撃という 1 つの行動類型が傷害という類型に含まれたり、現代の医療水準であれば助かっていたような負傷の結果として死に至ったがゆえに殺人という類型に含まれたりすることで、不整合が生じてしまうのである<sup>74</sup>。

第二に、いかなる史資料をデータ元としているかという点への考慮の不足である。すなわち、前近代に関する犯罪件数や戦争などでの死者数をどのように算出するのかという問題である。犯罪史研究では裁判記録が主たる史料類型として用いられるが、計量的分析の際には以下のような難点が存在する。1 つは、多くの場合で「訴追された事件」のみが記録され、いわゆる隠数も存在することである<sup>75</sup>。また、ヨーロッパにおいて犯罪行為とその処理が記録されるのは中世後期

<sup>70</sup> ZIEMANN, Benjamin, Rezension zu: Pinker, Steven: *The Better Angels of Our Nature. Why Violence Has Declined*. London 2011, in: *H-Soz-Kult*, 30.03.2012, <[www.hsozkult.de/publicationreview/id/reb-16894](http://www.hsozkult.de/publicationreview/id/reb-16894)>; ZIEMANN, Benjamin, *Histories of Violence* (review no. 1232), in: *Reviews in History*, 2012, <<https://reviews.history.ac.uk/review/1232>> (いずれも最終アクセス日: 2020 年 1 月 28 日)。

<sup>71</sup> ROTH, Randolph, Does *Better Angels of Our Nature* Hold Up as History?, in: *Historical Reflections/ Réflexions Historiques*, Volume 44 (2018), Issue 1, 91-103, here 94-95.

<sup>72</sup> こうした議論については、SCHWERHOFF, Gerd, *Aktenkundig und gerichtsnotorisch. Einführung in die Historische Kriminalitätsforschung*, Tübingen 1999, 46-68 を参照。

<sup>73</sup> LOETZ, Francisca, *Gewalt in der Geschichte der Menschheit: Probleme, Grenzen und Chancen historischer Gewaltforschung*, in: SUTTERLÜTY, Ferdinand/ JUNG, Matthias/ REYMAN, Andy (Hg.), *Narrative der Gewalt. Interdisziplinäre Analysen*, Frankfurt am Main 2019, 87-113, here 94-98.

<sup>74</sup> ZIEMANN, Benjamin, Eine »neue Geschichte der Menschheit«? Anmerkungen zu Steven Pinkers evolutiver Deutung der Gewalt, in: *Mittelweg* 36, 21/ 3 (2012), 45-56, here 51.

<sup>75</sup> SCHWERHOFF, *Aktenkundig und gerichtsnotorisch*, 53-54; BUTLER, Sara M., Getting Medieval on Steven Pinker. Violence and Medieval England, in: *Historical Reflections/ Réflexions Historiques*, Volume 44 (2018), Issue 1, 29-40, here 32.

になってからであり、それ以前の時代について十分な情報やデータを得ることは困難である<sup>76</sup>。さらに前近代では、管轄する裁判権の分立や錯綜により裁判記録の形態や性質、残存状況が地域によって多様なため、比較が困難でもある<sup>77</sup>。

とくに歴史研究者が懐疑的なのは、殺人率の基準となる人口の算出である。現代に比類する人口調査のない前近代において正確な人口を計ることが難しい以上、殺人率の信憑性は担保され得ない<sup>78</sup>。例えばイギリスの中世史研究者 M・バトラーによれば、ドゥームズデイ・ブック (Domesday Book) は中世の人口調査と言えるものだが、そこで計上されているのは家主のみで、彼らより多数である女性や子供、独身者などは除外されていた。また、修道会士や城に仕える者も対象とはなっておらず、ロンドンなどの大都市も含まれておらず、このような点から同史料が当時のイングランドの人口を算出するには寄与しないという<sup>79</sup>。他方でドイツの近世史研究者 G・シュヴェアホフは、M・アイズナーなど計量的分析を採用する研究者が、すでにこうした方法論上の諸問題を認識しているにもかかわらず、得られたデータを「現実に近いもの」と見なし、しまっている点をとくに問題視している<sup>80</sup>。

第三に、記録上での犯罪件数の多さが同時代人の「暴力に満ちている」という判断や感覚を物語っているわけではないという点である。とくに犯罪史研究者は、殺人こそが暴力を代表する形態でありその件数から暴力の程度を測ることができるという見方に警鐘を鳴らす<sup>81</sup>。すなわち、殺人が暴力全体を代表するものであるという前提のもと、その計量的分析を行うことで、異なる時代の暴力の文脈が考慮されずに平準化される危険性が存在する<sup>82</sup>。これに関連して、ピンカーの叙述にはより大きな問題が潜んでいる。それは、各章で扱っている「暴力」が殺人から拷問、テロ、戦争まで多岐に渡っており一貫性がない点である。おそらくピンカーは「人を傷つけたり人命を奪ったりする行為」を射程に入れていると推測されるが、明確な類型化や定義もしておらず<sup>83</sup>、他の研究分野による定義づけの試みを参照しているわけでもない<sup>84</sup>。それゆえ、今回取り上

<sup>76</sup> SCHWERHOFF, Aktenkundig und gerichtsnotorisch, 24-25.

<sup>77</sup> SCHWERHOFF, Aktenkundig und gerichtsnotorisch, 27-35; BUTLER, Getting Medieval on Steven Pinker, 32.

<sup>78</sup> ZIEMANN, Eine »neue Geschichte der Menschheit«, 51; SCHWERHOFF, Gerd, *Vom brutalen Mittelalter zur Zivilisierung der Umgangsformen? Formen und Wandlungen der Gewaltkriminalität in der Frühen Neuzeit*, Leipzig 2002, 11.

<sup>79</sup> BUTLER, Getting Medieval on Steven Pinker, 32.

<sup>80</sup> SCHWERHOFF, *Vom brutalen Mittelalter zur Zivilisierung der Umgangsformen?*, 12.

<sup>81</sup> SCHWERHOFF, Aktenkundig und gerichtsnotorisch, 120; SCHWERHOFF, *Vom brutalen Mittelalter zur Zivilisierung der Umgangsformen?*, 16; LOETZ, *Gewalt in der Geschichte der Menschheit*, 88.

<sup>82</sup> DWYER, *Violence and its Histories*, 19. ここでドワイヤーは一例として、統計上暴力が減少している20世紀を「長い平和」と意味づけることで、その中で生じたジェノサイド、とくにホロコーストが統計的には目立たない出来事へと引き下げられてしまうと指摘する。

<sup>83</sup> MICALE, Mark S., Improvements, in: *The Times Literary Supplement*, 9 March 2012, 24-25, here 24.

<sup>84</sup> 例えば社会学における暴力の類型化と定義づけが参照されるべきであろう。IMBUSCH, Peter, *Der Gewalt-*

げている歴史研究者からの論評は一樣に、暴力の時代や地域に応じた歴史的文脈や意味を把握し、ある社会がいかなる行為を暴力と見なし暴力として扱っていたのか、そうした態度が時代を経てどのように変化したのかを見極める必要性を強調しているのである<sup>85</sup>。

そして第四に、暴力が人類全般と結びついた行動、人類学的な定数と見なせるか否かという点である。レッツは、「暴力とは根源的に存在する行動資源であり、永続的に可能性のある行動の選択肢である」とするJ・バベロウスキーの指摘に対して、個々の暴力行為が人間の持つ暴力的素因とどう関わっているのかを説明するべきとする<sup>86</sup>。暴力の歴史を扱う歴史研究者は暴力を人類学的な定数とは見なさず、歴史的に可変する現象と理解している<sup>87</sup>。仮に定数と見なすと、ピンカーの叙述に明確に表れているように、その増減のみで社会の進歩や後述する文明化の程度を測る尺度になってしまうという問題が生じるからである<sup>88</sup>。

## 2-2. 文明化論をめぐる

ピンカーは、とくに近代に至る長期的な暴力の減少を説明する枠組みとして、N・エリアスの文明化論を採用している。文明化論は、「暴力的で残虐な中世」と「そうした暴力性を文化的に変容させた近代」という単純化された図式を展開したがゆえに<sup>89</sup>、ピンカーの主張とも親和的で

---

begriff, in: HEITMEYER, Walter/ HAGAN, Johann (Hg.), *Internationales Handbuch der Gewaltforschung*, Wiesbaden 2002, 26-57; NUNNER-WINKLER, Gertrud, Überlegungen zum Gewaltbegriff, in: HEITMEYER, Wilhelm/ SOEFFNER, Hans-Georg (Hg.), *Gewalt. Entwicklungen, Strukturen, Analyseprobleme*, Frankfurt am Main 2004, 21-61.

<sup>85</sup> MICALE, Improvements, 24; ZIEMANN, Eine »neue Geschichte der Menschheit«?, 48; DWYER, Philip/ DAMOUSI, Joy, Theorizing Histories of Violence, in: *History and Theory* 56 (2017), Nr. 4, Theme Issue 55: Theorizing Histories of Violence, 3-6; DWYER, Violence and its Histories, 20; LOETZ, Gewalt in der Geschichte der Menschheit, 107. 併せて、すでにピンカーの著書より前に発表された CARROLL, Stuart, Introduction, in: id. (ed.), *Cultures of Violence. Interpersonal Violence in Historical Perspective*, New York, 2007, 1-43 も参照。

<sup>86</sup> LOETZ, Gewalt in der Geschichte der Menschheit, 97.

<sup>87</sup> ULBRICH, Claudia/ JARZEBOWSKI, Claudia/ HOHKAMP, Michaela, Einleitung, in: DIES. (Hg.), *Gewalt in der Frühen Neuzeit. Beiträge zur 5. Tagung der Arbeitsgemeinschaft Frühe Neuzeit im VHD*, Berlin 2005, 9-14, here 13; LOETZ, Francisca, Gotteslästerung und Gewalt: ein historisches Problem, in: GREYERZ, Kaspar von/ SIEBENHÜNER, Kim (Hg.), *Religion und Gewalt. Konflikte, Rituale, Deutungen (1500-1800)*, Göttingen 2006, 305-319, here 314; DWYER, Violence and its Histories, 17.

<sup>88</sup> SCHWERHOFF, Aktenkundig und gerichtsnotorisch, 120; EIBACH, Joachim, Gibt es eine Geschichte der Gewalt? Zur Praxis des Konfliktes heute, in der Vormoderne und im 19. Jahrhundert, in: HABERMAS, Rebekka/ SCHWERHOFF, Gerd (Hg.), *Verbrechen im Blick. Perspektiven der neuzeitlichen Kriminalitätsgeschichte*, Frankfurt am Main 2009, 182-216, here 188.

<sup>89</sup> SCHWERHOFF, Gerd, Zivilisationsprozeß und Geschichtswissenschaft. Norbert Elias' Forschungsparadigma in historischer Sicht, in: *Historische Zeitschrift* 266 (1998), 561-605, here 598-599.

ある<sup>90</sup>。こうしたピンカーによる文明化論の無批判の受容に鑑みて、彼の叙述に対する歴史研究者からの論評は文明化論への懐疑として展開されている点が重要である<sup>91</sup>。

第一に史料批判の不足である。中近世史研究の立場から文明化論の批判的検討を試みた G・シュヴェアホフによれば、エリ阿斯が中世の人々の振る舞いに関する史料として用いた礼儀作法書 (Manieren- und Zuchtbücher) といった類型について、それが持つ規範的性格を考慮せず、社会的現実と同一視してしまっているという<sup>92</sup>。さらに、エリアスの議論でも重要であるはずの「男女関係についての考え方の変遷<sup>93</sup>」や「攻撃欲の変遷について<sup>94</sup>」といった箇所では礼儀作法書に依拠せずむしろ逸話的な史料や文献を用いており、その選択も一面的であるとする<sup>95</sup>。

ピンカーも、歴史学的方法論への見識のなさゆえに、エリ阿斯が用いる史料を問題視することなく引いている<sup>96</sup>。この傾向は中世を扱う第3章でとくに顕著で、例えば男性が処刑されたり騎士たちが農民を襲撃したりしているといった残虐なシーンを描いた画像を取り上げている<sup>97</sup>。拷問については、博物館のウェブサイトを参照し、その残虐性を伝えようとする<sup>98</sup>。いずれもセンセーショナルな史資料を用いてセンセーショナルな歴史を描こうとしている<sup>99</sup>。さらには、いわゆるアーサー王伝説の描写を歴史的事実として扱っている点も問題であろう<sup>100</sup>。さらにピンカーは、同章で中世の殺人率を扱う際に T・R・ガーや M・アイズナーが整理した統計を参照している。しかし、すでに述べたような中世に関するデータが持つ限界や欠陥、さらにはこうしたデータが生み出された文脈が考慮されていない<sup>101</sup>。バトラーによると、ガーやアイズナーが依拠

<sup>90</sup> ZIEMANN, Eine »neue Geschichte der Menschheit«, 52.

<sup>91</sup> 実際、文明化論への懐疑が1990年代初頭からのドイツにおける犯罪史研究の重要な原動力となっている。これについて筆者は、齋藤敬之「中近世ドイツ犯罪史研究における暴力：研究動向の紹介」(ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所第二十六回研究会、早稲田大学、2019年5月11日)として口頭報告を行っている。

<sup>92</sup> SCHWERHOFF, Zivilisationsprozeß und Geschichtswissenschaft, 573.

<sup>93</sup> 邦訳では、N・エリ阿斯著、赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程・上 ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』法政大学出版局、2010年、第二部第九章に該当する。

<sup>94</sup> 邦訳では、エリ阿斯『文明化の過程・上』、第二部第十章に該当する。

<sup>95</sup> SCHWERHOFF, Zivilisationsprozeß und Geschichtswissenschaft, 575.

<sup>96</sup> ZIEMANN, Rezension; ZIEMANN, Histories of Violence; MICALE/ DWYER, History, Violence, and Steven Pinker, 4; LOETZ, Gewalt in der Geschichte der Menschheit, 89.

<sup>97</sup> BUTLER, Getting Medieval on Steven Pinker, 29. 該当箇所は、ピンカー『暴力の人類史 上』、137-139頁。

<sup>98</sup> BUTLER, Getting Medieval on Steven Pinker, 30-31. 該当箇所は、ピンカー『暴力の人類史 上』、246-250頁。なおドイツでの例として、すでに BOECKMANN, Hartmut, Das grausame Mittelalter. Über ein Stereotyp, ein didaktisches Problem und ein unbekanntes Hilfsmittel städtischer Justiz, den Wundpegel, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht* 38 (1987), Heft 12, 1-9 では、中世後期の都市における司法や拷問に関する展示が「残虐な中世」というステレオタイプを提供し得ることが歴史教育の観点から批判的に論じられている。

<sup>99</sup> BUTLER, Getting Medieval on Steven Pinker, 30.

<sup>100</sup> BUTLER, Getting Medieval on Steven Pinker, 31. 該当箇所は、ピンカー『暴力の人類史 上』、55頁。

<sup>101</sup> BUTLER, Getting Medieval on Steven Pinker, 31. 該当箇所は、ピンカー『暴力の人類史 上』、130-131頁。

したのは、それぞれ13世紀及び14世紀のイングランドの犯罪統計を集めたJ・B・ギヴンとB・A・ハンアウォルの研究成果であったが、すでにそれらの統計が不正確であると評価されてきたという<sup>102</sup>。加えてギヴンやハンアウォルが依拠したのは裁判所の判決ではなく告訴状の数であったが、中世ではある犯行の疑いや噂のみで告訴に至ることも多く、この点によって現代との比較を難しくするという<sup>103</sup>。いずれにしても、ピンカーがこうした中世の法体系や司法制度を理解していない点が問題となるのである<sup>104</sup>。

第二に、文明化論に適合させようとする研究動向への批判である。先に挙げたガーやアイズナー以外にも、P・スピーレンバーグ（ネーデルラント）やR・ミュシャンプレ（フランス）、J・シャープ（イングランド）といった研究者は、中近世の各地域における暴力犯罪を実証的に分析する中で、殺人率の算出によって殺人をはじめとする暴力の減少を論じてきた。しかし彼らは、利用史料や統計元の孕む問題を十分に考慮していないだけでなく、分析結果を安易に文明化論に当てはめたり還元したりしており<sup>105</sup>、例えばG・シュヴェアホフは（とくにスピーレンバーグに対してであるが）、実証的なデータを説明するために文明化論という大局的な叙述を参照し、それに適合させることで歴史的傾向に厳粛さを付与しているにすぎないと批判している<sup>106</sup>。

第三は、中近世社会における暴力に関する前提である。エリアスはA・リュシェールやJ・ホイジンガによる中世の騎士の残虐な行動に関する叙述を引きながら、彼らの攻撃欲の強さや暴力性を強調した<sup>107</sup>。このようにエリアスが暴力を情動の発露と理解している点が文明化論への批判点の1つとして挙げられる<sup>108</sup>。こうした理解は、ピンカーの叙述、とくに暴力の内的要因を扱う第8章及び第9章にも反映されている。B・ツィーマンは、ピンカーの説明に暴力の発露は個人の持つ攻撃的な素因（aggressive Disposition）に帰するという心理学的要因の産物とする理解が存在し、こうした内的な素因をそのまま外的な行動に置き換える「機械」としての人間像が窺えると指摘する。そして、人々の相互関係といった社会的状況を重視すれば、必ずしも暴力の発露

<sup>102</sup> BUTLER, *Getting Medieval on Steven Pinker*, 31.

<sup>103</sup> BUTLER, *Getting Medieval on Steven Pinker*, 33.

<sup>104</sup> BUTLER, *Getting Medieval on Steven Pinker*, 35.

<sup>105</sup> CARROLL, *Introduction*, 19; DWYER, *Violence and its Histories*, 18-19; LOETZ, *Gewalt in der Geschichte der Menschheit*, 89-90.

<sup>106</sup> SCHWERHOFF, Gerd, *Criminalized violence and the process of civilisation: a reappraisal*, in: *Crime, Histoire & Sociétés/ Crime, History & Societies*, Vol. 6, n°2 (2002), Online since 25 February 2009 < <http://chs.revues.org/418> > (最終アクセス日：2020年1月28日) ; SCHWERHOFF, Gerd, *Gewaltkriminalität im Wandel (14.-18. Jahrhundert). Ergebnisse und Perspektiven der Forschung*, in: OPITZ, Claudia/ STUBER, Brigitte/ TANNER, Jakob (Hg.), *Kriminalisieren - Entkriminalisieren - Normalisieren. Criminaliser - décriminaliser - normaliser*, Zürich 2006, 55-72, here 62.

<sup>107</sup> SCHWERHOFF, *Zivilisationsprozeß und Geschichtswissenschaft*, 576-577; CARROLL, *Introduction*, 3-5.

<sup>108</sup> SCHWERHOFF, *Zivilisationsprozeß und Geschichtswissenschaft*, 584; SCHWERHOFF, *Aktenkundig und gerichtsnotorisch*, 120-121.



が個人的な動機に帰するとは限らないと論じる<sup>109</sup>。同様にS・キャロルも、ピンカーの叙述には、S・フロイトの影響を受けて、人間の行動が認知的及び感情的能力のシステムに左右されるという理解が反映されており、これによって暴力を犯す人間や暴力の多い社会が暴力を抑制するシステムが欠如したものとして描写されてしまうと論じている<sup>110</sup>。

## おわりに

ピンカーは、『暴力の人類史』の叙述で暴力の減少の歴史と心理学の絡み合いを提示する中で、近代性が暴力の減少に貢献した点及び暴力を抑制し減少させる機能が人間に備わっている点を強調している<sup>111</sup>。このような主張は、価値観や現実の情勢が不安定な現代に生きる人々にとってはいわば気休めになる（comfort）ものかもしれない。

それでも、我々はこのような主張に満足してよいのだろうか。ピンカーの叙述には「感情と理性」や「野蛮と文明」といった二項対立的な理解が通底していることは間違いない。しかし、このような理解では暴力をより深くかつより適切に理解することはできないだろう。本稿で取り上げた歴史研究者の論評や批判からは、暴力を歴史的文脈に位置づけ、過去の社会や文化に特徴づけられた行動として把握する必要性と可能性が提示されている<sup>112</sup>。仮に暴力を「悪しきもの」や「排除すべきもの」と道徳的に前提にした場合でも、そのような視点で「暴力の多かった」過去を判断し断罪してよいことにはならない。むしろ当時の社会で、「なぜ暴力を抑え込むことができなかったのか、あるいは抑え込もうとしなかったのか」といった点や「社会に暴力を内包していた場合にどのようにバランスや秩序を取っていたのか」といった点を問う方が生産的であろう。「暴力の多かった」過去は確かに「異国」かもしれないが、それはピンカーが述べるような意味ではなく、別の価値観や行動原理を持つ世界であったと理解すべきなのである<sup>113</sup>。

【本稿は、早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号：2019C-093）の助成を受けた研究成果の一部である。】

<sup>109</sup> ZIEMANN, Eine »neue Geschichte der Menschheit«?, 54.

<sup>110</sup> CARROLL, Thinking with violence, 37-38.

<sup>111</sup> ピンカー『暴力の人類史 下』、574-577 頁。

<sup>112</sup> レッツは「暴力を歴史化する（Gewalt historisieren）」という表現を用いている。LOETZ, Gewalt in der Geschichte der Menschheit, 107.

<sup>113</sup> マクミラン『誘惑する歴史』、177-178 頁。